



## 巻頭言ー“ストーリー”から“シーン”へー

Jポップ（邦楽）の流行は、時代の変化の映し鏡のようになっています。たとえば1960年代から70年代は、かぐや姫の「神田川」（1973）や「赤ちょうちん」（1974）に代表されるように「四畳半フォーク」が流行りました。恋人同士だけの貧しい暮らし、体制への反抗、そして「安保闘争」の挫折、バンパンの『いちご白書』をもう一度（1975）も、そうした時代の空気をよく表しています。

80年代を象徴するのは、BOØWY でしょうか。そこには、社会に反発することで確認できる自分らしさ、夢を見続ける自分とそれを見守る彼女（=母性）による承認といったモチーフがありました。この時期は「受験戦争」が社会問題となり、後半にはバブル景気があり、“反抗”すべき“社会”を意識することができた時代だともいえます。

しかし、90年代はバブルが弾け、終身雇用や年功序列を核とする日本型雇用システムが崩れ、管理教育が見直され、今日では批判的となっている「ゆとり教育」に移行します。また男女雇用機会均等法のもと女性の社会進出が進み「絶対的母性」の喪失をもたらします。この時期に流行ったB'Zは、こうした厳しい状況のもと、“努力”することで得られる自分らしさ、勝ち続ける美学をリズムカルに唄っていました。

ところが90年代後半のMr.Childrenやスピッツになると、“反抗”や“努力”の側面が消え去り、不安定な世界での変わらないキミとボクとの二人の世界の“関係性”が唄われるようになります（阿部真大『地方にこもる若者たち』朝日新書2013）。

2000年代になると、スマップの「世界に一つだけの花」（2003）などもありますが、全体としてはリズムやノリ、そしてダンスが重視されるようになります。90年代から2000年代は「失われた20年」と称される時期であり、日本の平等神話が崩れて貧困が顕在化する時期でした。しかし、かつての60・70年代のような社会問題・政治問題（「政治の季節」）とはならず、「生きづらさ」という個人化された課題として受け止められるようになります。「世界に一つだけの花」や、ゆずの「栄光の架橋」（2004）などは、苦悩する人たちの応援ソングの機能をはたしていたのかもしれませんが、また、現実と向き合うことを紛らわそうとする心情が、リズムやノリ、そしてダンス中心の楽曲を求めたのかもしれませんが。



クリスマス飾りつけ

さて、女性シンガーでは、ユーミンからドリカムへの変化が象徴的です。松任谷由実（ユーミン）はすでに1972年に荒井由美でデビューしていますが、80年代にヒット曲を連発します。ユーミンの曲は、女性を主人公とした女性の成長の“物語（ストーリー）”です（酒井順子『ユーミンの罪』講談社現代新書2013）。一方で1988年に結成したDREAMS COME TRUE（ドリカム）は、90年代の音楽シーンをリードしますが、その曲は「それってある」的な“シーン”の羅列で、そこにはユーミン的な“ストーリー”性はみられません（宮台真司『私たちはどこから来て、どこへ行くのか』幻冬舎2014）。90年代以降、非正規雇用が増大し、地方の衰退が加速し、非婚化が進み、単身世帯が増加し…というように社会のカタチの大きな変化のなかで、“ストーリー”（関係性の物語）から“シーン”（出来事の羅列）への変化が生じます。

私とは、「私に対する私の物語」です。私であることを確認する（“物語る”）ためには、それを聴いてくれる他者の存在が不可欠です。しかしコミュニティ（人の集合体・“私たち”）を実感できる関係性が衰退してきたために、私を物語る機会そのものが枯渇しています。そしてそうした状況が、JポップやInstagramなどさまざまな流行にも影響しているのかもしれませんが、“物語”化しがたいが故に、刺激的な“シーン”を求め、そのことが物語化をさらに困難にしよう。「インスタ映え」する素敵な“シーン”をいくら集めても、“物語”にはなりません。物語るとは、ある筋のもとで、さまざまな出来事を解釈し、意味づけることで、相互に関連づけていくことです。物語化しにくい社会であるからこそ、自らの人生においても、そして支援の現場でも、物語ることを大切にすべきなのかもしれません。

KCDラボ代表 松端克文

## シリーズ 情勢分析と運営・実践の処方箋 今月のテーマ：「強度行動障害」について

知的障害のある人たちの支援の現場では、「強度行動障害」のある人への支援のあり方が重要な課題のひとつとなっている。日常生活のなかで、明確な原因がわからないままに繰り返される自傷や他害、器物破損、激しいこだわりなどの行為は、支援者を困惑させるし、周囲の人たちにも大きなストレスとなり、なによりも本人を苦しめている。したがって、そうした「強度行動障害」といわれる「問題（とされる）行動」を軽減するための支援の方法が求められている。

そこでちょっと立ち止まって考えてみたい。まず、行動障害の軽減といったことに限らず、そもそも人が誰かを自分の意に沿うようにコントロールすることなどできない。もし、そうしたことが可能となるのなら、それは他者を「マインドコントロール」下においている状態である。相手のこと（置かれている状況や気持ち）を思いやることなく、自分の都合を優先するような人物は、人を不快にさせる。支援の現場でも同様である。「強度行動障害」といわれるような障害を操作的・即効薬的に解消したいとの支援者の思いは、相手をこちらの意のままに動かしたいという欲望と同根である。支援者は、そうしたことを反省的に自覚しておかなくてはならない。

次に、「強度行動障害」なる「障害」はないということを理解しておく必要がある。生まれたときから自傷行為をしたり、暴力をふるったりする乳児は存在しない。生育過程において、いろいろな要因が重なって、そうした行動パターンを身につけるようになったのである。厚生労働省において強度行動障害児者研究が始められたのが1988年、強度行動障害特別処遇事業が始められたのが1993年なので、1980年代にこうした行動特性を示す人たちが人数的にも増え、顕在化してきたといえる。

では、強度行動障害といわれるような行動を生じさせるようになった要因はなにか。一概にはいえないが、自閉症的な傾向があり、自分の気持ちを伝えたり、他者の気持ちや意図をくみとることが苦手なタイプの人が、不本意な状況に置かれ続けることで、その苦しさや悲しさ、怒りなどのある種の行動を通じて表出しているのではないかと考えられる。たとえば、幼少期に、集団でのプログラムに参加すべき状況において、ひとり別のことをしているような子どもは、しつけや療育、教育、指導の名のもとに、その行動を規制され、集団への参加を強制されることが多い。挨拶はできなければならないし、好き嫌いはあってはならないとされるので、挨拶するよう促され、嫌いな物でも無理に食べさせられる。本人が拒否したり、癩癩（かんしゃく）を起こしても、幼い間は無視したり、抑えつけることができる。

スーパーや電車など街中で、親に無理をいって駄々をこねたり、泣いている乳幼児に対して、叱りつけたり無視をしている光景をよく見かける。そのように自らの要求をというより、自らの存在そのものを受け止めてもらえないという体験

を重ねると、障害の有無にかかわらず、根本的なところで情緒が不安定になるし、自己肯定感が低くなる。

もしその人に知的な障害や自閉症などがなければ、「生きづらさ」として重くのしかかることになり、それを本人なりに乗り越えられなければ、各種の依存症やうつ症状としてあらわれてくるかもしれない。もし障害があれば、行動上の障害としてあらわれてくるのかもしれない。

このように捉えると、「強度行動障害」とされる行動をとる人の支援のポイントは、その人をしっかりと受け止めて、信頼関係を形成し、本人の「納得」のもと、「本人のペース」で生活できる環境を整えていくことができるか否かに尽きる。ある種の行為は、それ自体が本人が意識しているか否かにかかわらず、本人の身体・生命レベルでの主体的な反応である。そこには「意味」がある。この意味を理解するためには、2つの観点が重要となる。

ひとつは、なぜそうした行動をとるのかという原因（なぜ？）を、本人の乳幼児期までさかのぼり、親との関係や学校での状況などもふまえながら、今日に至るまでの本人の人生全体を通して、本人に寄り添いながら、本人の目線でそのときどきの苦悩や苦痛、怒りや悲しさ、悔しさなどを、感じとり、探っていくことである。換言すれば、「なぜそうした行動をとらざるを得ないのか」ということを、本人の置かれてきた状況・いまの本人をとりまく状況のなかで、探っていくという姿勢が重要なのである。

もうひとつは、その行動の前後で、なにがもたらされているのか（行動の機能はなにか？）を分析することである。たとえば、その行動により、嫌なプログラムに参加しなくてもよくなるとか、支援者がかまってくれるようになるとか、日課の空白を埋めているとか、そのときの前後の状況を把握し、その行動の意味を分析するのである。

このように時間軸を長くにとって行動の原因を探っていくことと、時間軸を短くして行動によりもたらされる変化を分析することを組み合わせて、本人の「行動の意味」を理解する糸口が見つかれば、具体的な支援上の課題を明確にして、チームとして計画的に支援していくことが必要となる。ティーチ（TEACCH）プログラムによる「生活の構造化」も、本人の目線で環境を整えるためのひとつの方法であって、本人をそのプログラムに当てはめるような愚を犯してはならない。

どのようにすること、どのようになることが、本人の人生にとってより望ましいことなのか、日常生活上の「できる／できない」との評価が、実際のところどれくらい意味のあることなのかといったことを、常識にとらわれずに問い直すことが重要となる。

自立とは、その人が周囲との関係のなかで輝いている状態である。それはその人や支援者も含めて周囲の人たちがそれぞれにエンパワーメントしているということでもある。そのような関係の形成が求められる。 KCD ラボ代表 松端克文

（武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科教授）

## ザ・ワーカー ～支援の現場から～

今月号より、新シリーズとして現場のワーカーへのインタビュー「ザ・ワーカー」が始まります。最初は就労継続支援B型事業所サニーサイド神戸の安田和晃さんです。

### ――まず、主な仕事内容について教えてください。

はい、主な仕事内容としては、利用者のみなさんと一緒にいろいろな作業をしたり、気分転換のための活動などに取り組んだりしています。作業は、請負作業としてタオル折りや医療キットの検品、羊毛の掃除などがあります。農作業としては菌床しいたけ栽培や花苗・野菜の生産、施設外就労としては、フルーツフラワーパークでの園地管理、食品会社での食品加工作業などがあります。そのほかにも、行政からの委託によって空き地や個人宅の除草や剪定を行うなど、さまざまな作業に取り組んでいます。生産した花苗や野菜の販売も、市営住宅や近隣店舗前などで定期的に行っています。毎週金曜日は施設内でも販売しているのですが、とても評判がいいんです(笑)。気分転換の活動も大切なので、利用者のみなさんと買物や外食を楽しんだり、旅行に出かけたりする活動も行っています。

### ――なぜ、福祉の仕事に就こうと思われたのですか。

以前はスポーツクラブでトレーナーとして働いていたのですが、そこのお客様だった陽気会の職員から、「一緒に働いてみませんか」と声をかけていただいたことがきっかけです。スポーツクラブの閉鎖と誘っていただいたタイミングが合って、その縁で現在に至っています。もともと、なにか社会や人の役に立てる仕事に就きたいと考えていたので、陽気会に就職してよかったと感謝しています。

### ――いまの仕事のおもしろさ、楽しさはどういったところにありますか。

サニーサイド神戸というチームで、利用者の方々と一緒に食事をして、汗を流してともに働けるところにあります。



安田 和晃 (やすだ かずあき)  
就労継続支援B型事業所 サニーサイド神戸  
2010年4月 おかば学園入職  
2013年4月 サニーサイド神戸へ異動

イメージとしては、学生時代に熱中した部活動のような感じでしょうか。支援員というよりは、「一緒に働く同志」のような思いで日々過ごしています。個性豊かな利用者とのかかわりは、ほかの仕事ではなかなか経験することのできない面白さや、やりがいがあると思います。

私が最初に入職したのは児童の入所施設でした。児童施設にも、成人の通所施設にも、違った仕事のおもしろさや楽しさがあると思います。児童入所施設では、元気な子どもたちと毎日遊んだり、勉強したり…。大変なこともありましたが、日々成長していく子どもたちとのかかわりは、とても楽しかったです。サニーサイド神戸に異動してからは、利用者が成人の方々でしたので、かかわり方が少し変わりましたが、さきほど話したように同志、仲間という感覚になり、「ともに働く」という気持ちが強くなったように感じました。

### ――今後、取り組んでいきたいことはありますか。

そうですね…今年からリーダーになったので、これまで以上に多方向にアンテナを張って、利用者だけでなくほかの支援員のことも考えて仕事に取り組めるようがんばりたいと思っています。支援員同士、よいところを吸収し合えるようにしたいですね。それと、いまは施設内作業の種類が限られているので、作業の選択肢を増やすということからも、もっとそれぞれの利用者に合った作業が提供できるよう、豊富な施設内作業を展開していけるようにしたいですね。あとは、菌床しいたけ栽培の事業に中心としてかかわっているので、この事業をさらに拡大できればと考えています。

### ――これから福祉の仕事をしたいと考えている人たちへ向けてメッセージをお願いします。

「石の上にも三年」という気持ちで陽気会に就職し、気がつけば早いもので、今年で9年目になります。まったくの畑違いの業種から飛び込んだ福祉の世界でしたが、就職して本当によかったと思っています。福祉の仕事は、いままで自分が経験していなかったことを、利用者の方々とのかかわりを通して経験し、自分自身が日々成長していける、とてもやりがいのある仕事です。さまざまなことを考え、楽しみながら、一緒に社会のなかで生活していけるこの福祉の仕事に、ぜひ就いていただきたいです。もちろん、たくさんの人の人生にかかわることになるので、楽しいことばかりではありませんし、時には失敗したり大変な思いをしたりすることもあるかもしれませんが、でも、利用者とのかかわりを糧に、かならず乗り越えられると思います。みんなで一緒にがんばりましょう！

### ――力強いメッセージですね。本日はお忙しいところ、ありがとうございました。

座右の銘が『我以外皆我師』（「宮本武蔵」吉川英治著）と話されていた安田さん。ハードな勤務のあとにもジョギングを欠かさないという生活ぶり仕事に対する強い思いが、そのきれいな姿勢にあらわれていると感じました。これからのますますのご活躍、期待しています。(朝)

## 見たい！聞きたい！知りたい！ 教えて♪施設・事業所さ～ん ～「ワークプロジェクトまや」編～

去る12月7日、NPO法人みちしるべ神戸の事業所のひとつである「ワークプロジェクトまや」取材しました。みちしるべ神戸では、ワークプロジェクトと呼ばれる障害福祉事業所が5か所あり、就労移行支援サービスと就労継続支援B型サービスを行っているそうです。

今回の取材では、まずワークプロジェクトまやの取り組みについて、小鷹理事長より、わかりやすく丁寧に説明していただきました。



「ワークプロジェクトまやは、ケイヒン株式会社内にあり、事業所の特色は主に3つあります。1つ目は、利用者一人ひとりの特性を活かせる作業を提供することです。たとえば、スイスの Lindt（リンツ）チョコレート包装袋に詰める作業など、手先を使う細かい作業、重たいものを運んだりする動きの大きな倉庫作業があります。チョコレート作業は、自分のペースで丁寧にやる作業であり、それに対して、倉庫作業は、連携プレイが必要な作業です。

2つ目の特色として、就労・自立に向けての取り組みがあります。生活面での自立に関する取り組みとしては、講習会と称して、『ご飯を炊く、おかずを買う、盛り付け方を考える、食器を洗う』というように、ちょっとした工夫で簡単にできることを体験してもらったりしています。そのほかにも、異性との関係、乗り物に乗る練習、整理整頓などの講習会をしています。また、就労に向けて、履歴書の書き方、身だしなみ、模擬面接の講習会も実施しています。

さらに、就労移行の取り組みのひとつとして、ジョブコーチ支援というマンツーマンの支援をおこなっています。ジョブコーチは、就労移行を希望する方が、職場に適応するための支援、職場での人間関係を構築するための支援、会社内のルールやマナーについてのアドバイスを行います。ただ、ジョブコーチがずっと一緒にいないと働けないというのでは困るので、受け入れ先の事業所への支援も必要です。ジョブコーチは、事業所に対して、個々の障害特性を説明し、対応方法などについて提案をします。また、ご自宅でもリラックスして過ごせる環境をつくるために、職場での状況をご家族に説明します。このように、ジョブコーチは、ご本人とご家庭と会社との橋渡しをすることで、利用者の方が職場に適応し、長く働けるように、就職したあとも継続的に支援を行うという役割を担っています。

いままで話してきたように、就職や自立に向けて大変なこと多いなかで、3つ目の特色である、余暇活動の充実も必

要なことだと思っています。ワークプロジェクトまやでは、『まやレク』という独自のレクリエーション活動をしています。利用者の方は、仕事や作業に対して、『がんばるぞ！』という姿勢のときもあれば、『ちょっと疲れたなあ』というときもあり、気分の上が見られます。私たちにも同じことが言えると思いますが、メリハリをつけることが大切だと思います。なので、リフレッシュや気分転換をする時間を設けています。楽しんだあとのほうが、みなさん一生懸命作業をします。ひとつの例なんですけど、就労移行支援を利用されている方がいて、就職に対してあまりやる気を感じられず、『就職すると、こんな良いことがありますよ』などといくら説明しても、その方のモチベーションを上げることはできませんでした。でね、あるとき私、その方とUSJに行き、一緒に騒いで遊んだんです。帰りのバスのなかで、その方が『ぼく、就職がんばります』って。就職について、なにも話してないんですよ。『なんで？』って聞いても、『がんばります』としか答えない…。そのようなこともあるので、やはりレクリエーションって大切だなと思います。ほかにも『まやレク』には、毎年恒例豪華賞品付きボウリング大会、BBQ、初詣、カラオケ、食べ歩き、スポーツ、日帰り旅行などの全体レクがあります。ふだん作業して、講習会を受けているだけの関係よりも、遊ぶことによって、仲間が増えたりすることもあり、違った一面を見ることもできます。



最後に、『まや交流会』というものを紹介したいのですが、『まや交流会』とは、ワークプロジェクトまやから企業等に就労された方々との交流会のことです。この交流会では、職員に悩みを相談したり、現状報告をしたり、雑談したり…ときには、ご家族の方が参加することもあります。この交流会を通して、刺激を受ける方、ホッとされる方などがいるように思います。このように、ワークプロジェクトまやは、就労後も関係が切れるわけではなく、ずっとみなさんとつながっています。なので、安心してそれぞれの場で活躍していただきたい、そう願っています。」

**お話を伺ったあと、実際に作業風景を見学し、利用されている方のビデオメッセージを拝見しました。**

メッセージでは、「はじめは難しくて、わからないことが多かったけど、コーチと一緒に取り組むことで、できるようになりました。いまは自信をもって作業に取り組んでいます。」  
「仲間が増えて楽しいです」と笑顔で話されていました。

**とても刺激的で、まさに目からうろこの取材！お忙しいなか取材を引き受けてくださり、ありがとうございます。(真)**

## コラム～来談する方々に教えられること 3～

前回までも書かせていただいたように、カウンセリング場面では書物で知識の理解はしていても、実際に直面してみると戸惑うことが少なくありません。今回もカウンセリングを勉強するときに学ぶキーワードのなかから、知識と体験の違いに焦点をあててみたいと思います。

### 【守秘義務】

カウンセリングの案内には大抵「カウンセリングルームであなたが話したことは秘密にします。」といった内容が書かれていると思います。これは来談者がカウンセラーに安心して自分の心の内を話すことを保証するためのルールです。ところがこれをどのように実行するかは意外に難しいことです。今回は病院でのカウンセリングを例にとって考えてみましょう。

病院では診療内容を診療録（カルテ）に記載しなければなりません。今は電子カルテなどもありますが、私が病院勤務をしていた頃は紙のカルテでした。カウンセリングは医師のオーダーがあって行われます。診療の一環ということです。病院内で行われるカウンセリングであっても、来談される患者さんが話されたことについて、カウンセラーは守秘義務を負います。しかし、誰にどこまでを秘密にするのでしょうか。ここで外来患者さんの場合のカルテの流れを考えてみます。「誰がカルテの内容を知りうるのか」を考えながら、お読みいただければと思います。

私が勤務していた病院ではカウンセリングは保険診療で行われていました。患者さんが受付をすると、医事課の職員がカルテ棚からその方のカルテを探して、カウンセリングをオーダーした診療科（内科や心療内科など）の外来に運びます。そこでは担当の事務職員が日付印を押して、診察室に回します。医師は診察内容と薬の処方カルテに記載し、続いてカウンセリング部門に回ります。運搬は事務職員が行います。ここで、ようやくカウンセラーがカルテを手にするわけです。カウンセラーはカウンセリング記録を作成しますが、その記録の扱いについては後述します。カウンセリングが終わると実施したカウンセリングや心理検査の情報は、カルテに残さなくてはなりません。診療報酬の請求事務のためです。カウンセリング後、カルテは薬剤部門に回されます。カウンセリング部門には事務職員はいなかったため、カルテを回すのはカウンセラーです。薬剤部門では、薬剤師が医師の処方に従って薬を調剤してカルテを会計に回します。この流れでわかるように病院の全てのスタッフは、カルテの情報を知りうるのです。カウンセラーはこのことをよく知っておく必要があります。カウンセリングを行ったという事実と、診療に必要な情報はカルテに記載する必要があるのです。私は「患者さんの心の秘密を守りながら、診療に必要な情報を関係スタッフに開示する方法」について試行錯誤をした結果、カウンセリング記録はカウンセリングルームで保管し、「報告箋」というカウンセリング内容の要約をカルテに添付することにしました。

次に入院患者さんの場合を考えてみます。外来診察や検査の予定があると、病棟のナースステーションから放送で「〇〇さん、××においでください」と患者さんの呼び出しがあります。これを「カウンセリングに行ってください」と放送すると、その病棟のほかの患者さんにまで聞こえてしまいます。それで「〇階の待合室までおいでください」と呼んでいただくことにしました。ここまで考えないと、患者さんはカウンセリングを受けていることに対して余計な気をつかわなくてはなりません。

### 【多職種連携】

ひとりの患者さん（来談者）には医師、看護師、薬剤師、理学療法士、医事課職員などさまざまなスタッフが協力して治療にあたります。うまく治療を進めるためには、スタッフ間での情報共有が必須となります。カウンセリング部門も同様です。心を取り扱うからといって、連携チームに入らないことは考えられません。むしろ心を扱うからこそ連携チームのなかでその役割を果たせるのではないのでしょうか。ここに「守秘と連携の両立」が大きな意味をもってくのではないのでしょうか。患者さんがどのように苦しいのか、なぜそのような状況になったのか、といった患者さんの歴史を心の面から知りうるのがカウンセラーだと思います。すべてのスタッフが「なるほど。そういうわけでこの患者さんはここまで症状を訴えているのか！」と腑に落ちるとスタッフは治療に積極的になることができます。そしてその気持ちは必ず患者さんに伝わります。「連携」はスタッフ間の日頃のコミュニケーションがとても大切だと思います。元気でカウンセリングを終了したと思っていた患者さんが、待合室では沈んだ顔で会計の順番を待っていた、といった情報を医事課の職員が知らせてくれたことで、次のカウンセリングの進め方を考えることができた、といったことは少なくありません。こうしたことはお互いの役割に対する信頼関係があるからこそできるのだと思います。こうしたときに、カウンセラーは個々の患者さんが持っている歴史をどの職種にも理解してもらえるような言葉で、適切な分量で伝える力を磨くことが必要だとあらためて感じます。

なお、前回同様に今回もこのコラム欄をお借りして実際にあったことをもとに「来談者の方から学ぶこと」をお伝えしました都合上、来談者の方々および施設の詳細情報は個人情報の保護の点から割愛させていただき、一部改編させていただきましたことを追記させていただきます。

（武庫川女子大学 文学部 心理・社会福祉学科 健康心理学研究室 佐藤安子）

## ちょっといいですか？大西ですけど…

### —前を向き続けて生きる—

#### ◆年の瀬に振り返ること

世間では、12月が1年を振り返る時期だと言われています。皆さま、この1年はどのような年だったでしょうか。私は、ときに、1年どころか自分が今まで生きてきた50数年を振り返ってみることがあります。

で、障害のある方々が生きてこられた人生を想像したとき、私たちとは、比べ物にならないくらいの困難や苦労があったことは容易に想像できます。幼少の頃から差別と偏見に囲まれて生活されてきた方も多くおられることだと思います。近年では、虐待防止法や差別解消法等ができて、国を挙げて障害のある方々の人生をサポートしてくれるような状況にはなってきましたが、本当に幸せな生活の実現にはまだまだ遠い状況にあると思います。率先して利用者の生活を護っていかねばならない施設で、いまま相変わらず虐待や差別、時に傷害事件が起こっています。利用者の方々に辛い思いをさせて自分だけが幸せ気分になっていないか？なにも言わないから、どうせわからないからと、利用者の方々の切実な思いを軽く受け流していないか？この時期、自分自身の福祉職人としての言動を振り返ってみるのもいいかもしれません。で、もしなにか気づいたことがあったら、この年末年始という風潮を有効に利用して、「心機一転」考え方や言動を変えていってみるのもいいかと思えます。

#### ◆前を向いて生きていくこと

障害のある方々が遭遇する（であろう）困難や苦労を乗り越えることができるよう支援することが私たちの役割です。残念ながら過去にどんな苦労があったのかはわかりにくいものです。しかし、障害のある方々の現在と将来については支援していくことができます。多くの方が幸せを感じる数が少しでも増えるように向き合っていく「姿勢」が大事なのだと思います。

前を向き続けて生きていくこと…私が障害のある方々に教えていただいたことです。私自身もさまざまな困難や挫折に直面してきましたし、いままあれこれと問題を抱えて生活しています（誰もそうだとは思いますが）。しかし、決してあきらめず、前を向いて生きていくことができたら、きっと幸せな人生になっていくのではないかと思います。

この先も、年齢や立場に関係なくさまざまなことが身の回りに起こってくることは間違いありません。困難や挫折や苦労や揉め事や…、そのような場面に直面したときに自分がどのように考え、どのように立ち向かっていくのか？日々障害のある方々と向き合っている者だからこそ、乗り越えていくことができるためのヒントをもらうことができると思えます。（大）



## 陽気会は創立 60 周年を迎えます

陽気会は、知的障害児施設おかば学園を開所してから2018年9月1日で60周年を迎えます。

私たちは、これからも私たちの生活の舞台としての“コミュニティ”をより暮らしやすいやくなるよう“デザイン”し、

陽気会を拠点とした「福祉ゾーン」の創造を目指して、みなさまと力を合わせて実践していきます。

### ラボサポーター(協力会員)募集中です

施設・事業所サポーター 年間 10,000 円

個人サポーター 年間 1,000 円

\* 詳細は下記までお問い合わせください

編集委員会：松端 克文(KCD ラボ代表)  
朝日 満子(KCD ラボマネージャー)  
松端 真美(KCD ラボスタッフ)  
大西 博之(法人本部長)

〒651-1313

神戸市北区有野中町 2-5-19

社会福祉法人陽気会

KOBE 北・コミュニティデザイン Lab.

Tel : 078 (981) 7271

Fax : 078 (981) 0825

HP : <http://youkikai.or.jp/>

Email : [kcclab@youkikai.or.jp](mailto:kcclab@youkikai.or.jp)

